平成30年度「ふくしまの道徳教育」vol.2

～未来をつくる子どもたちの豊かな心をはぐくむために～

道徳のとびら

「ふくしまの先人たち」生き方クイズ

わたしたちのふるさと福島県には、自分の目標に向かって努力を続けたり、勇気をもって生きぬいたりした先人が数多くいます。どんな先人が、どのような生き方をしたのでしょうか。

写真の先人に当てはまる出来事はどれでしょう。家族で調べたり、話し合ったりしてみましょう。

瓜生 岩子（うりゅう いわこ）（喜多方市）

写真提供：瓜生岩子刀自顕彰会

遠藤 現夢（えんどう げんむ）（会津若松市）

写真提供：磐梯山噴火記念館

朝河 貫一（あさかわ かんいち）（二本松市）

写真提供：朝河貫一博士顕彰協会

田部井 淳子（たべい じゅんこ）（三春町）

写真提供：タベイプランニング

富田 高慶（とみた たかよし）（相馬市）

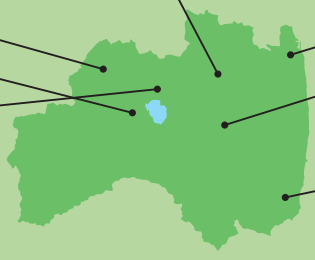
写真提供：南相馬市博物館

野口 英世（のぐち ひでよ）（猪苗代町）

写真提供：（公財）野口英世記念会

草野 心平（くさの しんぺい）（いわき市）

写真提供：いわき市立草野心平記念文学館



出来事に当てはまる写真の ◯ で囲まれた文字を左の □ に書いてみましょう。

ゆ	１歳の時に左手に大やけどを負い、小さい頃から友達に「てんぼう」とからかわれていました。しかし、それに負けず、どんなことにも歯を食いしばって粘り強く頑張りました。後に、世界で活躍する細菌学者となり、多くの人の命を救いました。
□	地球上で最も高い山であるエベレスト（8848m）に女性として世界で初めて登頂し、その後七つの大陸で最も高い山すべての登頂に成功した、世界的に有名な登山家です。山を愛し、山のすばらしさを伝える活動や山の自然環境を守る活動に積極的に取り組みました。
□	江戸時代、藩財政の再建と農村復興のため、二宮尊徳から学んだ二宮仕法（報徳仕法）によって藩を救いました。愛するふるさと復興のためには、尊徳から学ぶ必要があると確信し、弟子入りするために、数ヶ月間、尊徳宅を訪ね続けたというエピソードがあります。
□	磐梯山が1888年に噴火をし、北側に崩れて大地をうめ、緑が消えてしまいました。その荒れた土地に緑を取り戻そうと木を植える活動を行い、長い年月をかけて、現在の美しい裏磐梯の自然の基礎をつくりあげました。
□	世界的に有名な歴史学者。日露講和条約の締結のために努力したり、戦争を回避しようと様々なはたらきかけを行ったりと、国際的視野に立って世界平和のために行動しました。日本人初のイェール大学教授となり、大学には彼の名前が付いた公園があります。
□	「蛙の詩人」と呼ばれ、生涯にわたってカエルをテーマとした多くの作品をつくりました。「春のうた」という詩が小学校の国語科の教科書に掲載されています。好きな詩を作り続け、自分の好きなことを大切にしました。第１回読売文学賞や文化勲章を受けています。
□	戊辰戦争で敵味方なく負傷者を救護しました。「日本のナイチンゲール」とも呼ばれています。戊辰戦争後の孤児や身寄りのない老人のために幼学校や救育所を開設し、多くの人々の命を救いました。

※ 上から読むと、「ゆめをかなえる」になるよ。

先人の生き方からは、学べることがたくさんあるよ。みなさんは、どんな生き方にあこがれますか？

Future From Fukushima.
ふくしまから はじめよう。

福島県教育委員会

見て、読んで、感じて、みんなの思い、考えを!!

～道徳教育推進校の取組から～

「デイサービスのある施設を訪問して」　郡山市立大島小学校

本校の６年生は、総合的な学習の時間で「共に生きる　私たちの未来」をテーマに、福祉について学習しています。７月に実施した体験活動で、デイサービスのある施設を訪問した時の一コマです。お年寄りとの触れ合いを通して、相手の気持ちに寄り添い、ゆっくりゆっくりと触れ合う中で柔らかな表情が満ちあふれてきた様子の一枚です。体験活動を終えた子どもからは、「老人ホームの方々とぬり絵をしたり、お話をしたりして、とても楽しい時間を過ごすことができました。みなさんに長生きしてほしいと思います。」との声が聞かれ、いろいろな人と関わる喜びを実感した貴重な時間となりました。

「答えのない問題だからこそ……」　福島市立福島第四中学校

本校では今年度より「多面的・多角的、批判的に考えさせたり、議論・討論させたりする授業の工夫」に本格的に取り組み始めました。写真は３学年の道徳の授業で、「道はいつも開かれている（古谷綱武：著）」を読み、「本当に道はすべての人の前に開かれていると言えるのか」についてグループで論じ合っている場面です。意見は二つに分かれましたが、なかなか自分の考えを述べることができない生徒たちに、教師が「道徳の授業に正解はない。答えのない問題だからこそ、遠慮しないでもっと本音で語り合ってみよう。」と呼びかけています。

「ふれあいを通して感じたこと」　県立相馬東高等学校

本校は、今年度より初めて、２年次全員がインターンシップに参加しました。職場で働く方々との交流を通して、正しい職場観や勤労観を身に付けさせ、自分に合った進路決定に役立てることが目的です。

写真は地元の保育園での勤務の様子です。保育園の幼児と触れ合い、自然と笑みがこぼれたそうです。保護者の方からも「仕事の大変さ、様々な人とのコミュニケーションなど、多くの経験ができてよかった。」との感想をいただきました。生徒たちにとっては、今後の進路決定に向けて、大きな経験になったようです。

多様な性を受け入れ、共によりよく生きることを目指して

週に一回行われる「特別の教科　道徳」の授業だけでは、子どもたちに豊かな心は育まれません。学校では、「特別の教科　道徳」の授業を要にしながら、学校で行われる全ての教育活動で道徳教育を行うよう、計画を立てて実践しています。

会津坂下町において、昨年９月に人権教育授業研究会が行われ、「性の多様性を考えよう」を題材にした学級活動の授業では、「LGBT」（注）について理解を深めました。この授業は、多様な性を受け入れ、互いの違いを尊重し合う態度の育成を目指して実施したもので、「共によりよく生きる」という視点から道徳教育と深く関連しています。授業を通して、生徒は、「共によりよく生きるために自分は何をすればよいか」「だれもが安心して過ごせる社会とは」といった意識を高めていました。授業を行った先生に、感想をうかがってみました。

知ることからはじめよう　会津坂下町立坂下中学校　教諭　佐藤　容子

授業を行う前は、「思春期の生徒達にとって、この題材は難しいかな。」と思いました。しかし、授業の最初に「人間の性はいくつあると思う。」と聞くと、生徒達は驚きと同時に関心をもって「性の多様性」について学んでいきました。その姿を見て、授業を行ってよかったと思いました。LGBTについて考えたことは、私自身、勉強になりましたし、生徒達にとっても、これからの社会をよりよく生きるヒントになったと思います。

（注）LGBT：レズビアン（L）、ゲイ（G）、バイセクシャル（B）、トランスジェンダー（T）の略称

【特集】「家庭」「学校」「地域」が連携して育む、子どもたちの豊かな心【第３回】

つなげよう、地域の底力　～地域の方からふるさとのよさを学ぶ～

「子どもたちの『ふるさとを思う気持ち』を育てたいと思いました。」
吉田弘樹先生

「ふるさとのよさを学ぶことは『心の勉強』でもあると思うのです。」
江名守康さん

いわき地区道徳教育推進校、いわき市立江名小学校では、昨年10月に、郷土の「三匹獅子舞」を題材に授業を行いました。授業者の吉田弘樹先生と、ゲストティーチャーとして招かれた、諏訪神社の江名守康さんにお話を伺いました。

―　地域に伝わる「三匹獅子舞」を題材にしようと思われたのはなぜですか。

吉田先生：まずは「ふるさとを思う気持ちを育てたい」と思いました。担任している５年生の子どもたちは、総合的な学習の時間や学校行事などを通して、地域のことを学び、地域を大切にしたいという思いをもっていました。しかし、地域に対して自分たちに何ができるか、ということまでは至っていませんでした。今回はそのことも考えさせたいと思いました。

―　「三匹獅子舞」は『ふくしま道徳教育資料集』にも取り上げられています。

吉田先生：読み物資料なので、登場人物に自分を重ねて考えることができました。話の背景には震災があります。子どもたちは当時３歳でした。先輩や大人たちがどんなことを考えたか、地域にどんな思いをもっていたかを分かって欲しいと思いました。江名さんは、震災を機に、80年ぶりに「三匹獅子舞」を復活させた方です。生の声は、子どもたちの心に、ぐっとくるのではないかと思いました。

―　江名さんが、子どもたちに一番伝えたかったことは何ですか。

江名さん：地元の踊り手による獅子舞を、なぜ復活させたかったのかという思いです。江名地区は津波の大きな被害がありました。震災後、先が見えない中で、地域を元気づけたかった。近隣地区では盆踊りが継承されていて、世代を超えたコミュニケーションが自然に行われていました。羨ましく思うと同時に、是非とも復活させたいと強く思いました。しかし伝統芸能は、そう簡単に「やってみよう」とはなりません。だからこそ、子どもの時から経験していくことが大切なのではないでしょうか。地域に協力する、地域を作っていく。ふるさとを離れても、その経験は必ず役に立つと思います。

―　地域と学校との連携について、どのようにお考えですか。

江名さん：今は、躾の部分が学校に委ねられ過ぎていると感じます。「心の勉強」に関しては、家庭や地域の人間も教えられることです。挨拶、上級生が下級生の面倒をみること、お年寄りとの接し方など。地域で学んだことは、20年後、30年後に分かる。結果はすぐには見えません。ふるさとを思う気持ちは、子どもたちが今置かれている状況に、どのように関わっていくかということにつながるのではないかと考えています。

「モラル・エッセイ」コンテスト最優秀作品

県教育委員会では、毎年「モラル・エッセイ」コンテストを行っています。今回紹介するのは、平成30年度の部門別最優秀作品です。次は、みなさんの心温まる体験談やすてきなエピソードを、是非お聞かせください。

＊中学生の部　「たくさんの人々が伸び伸びと共存する世の中へ」

南会津町立荒海中学校　３年　星　優妃

私は、ある温泉施設へ行った時に一人のおばあさんに出会った。そのおばあさんは、浴槽のわきで自分のタオルを洗っているところだった。タオルを洗うこと自体はよいのだが、その洗った水が浴槽にこぼれてきているのに、全く気にしないで洗い続けるおばあさんを見ているのは正直、よい気持ちではなかった。

すると突然、そのおばあさんが話しかけてきた。「どこから来たの。」私は驚いた。まさか、話しかけられるとは。「私達、田島の方から来たんです。」そう私の祖母が答えると、目も合わせずに、「そう。私は何回もここに来てるんだ。」と話を続けてくれた。そのおばあさんは目が見えないと言う。その話を聞いてさっきまでのことがすべて納得できた。タオルを洗っていた時のことも目が合わないことも。そこで私が気付いたことは、人は見た目だけでどんな人なのか、何を必要としているのか分からないということだ。

この世の中には、目や耳が不自由な人、身体の一部が思うように動かなかったり無かったりする人がたくさんいる。また、妊婦さんや病気を持っている人もいる。私はたまに考えることがある。もし私がそういう人に会ってその人が困っている時、迷わず手を差し延べてあげられるだろうか。その人が本当は苦しいのに強がっていたら、その苦しみに気付いてあげることはできるだろうか。私はそういう時、周りの人が見て見ぬふりをしていても笑顔で声をかけられるような人になりたいと思っている。その人に代わってあげることはできなくても苦しい気持ちを減らしてあげたい。そしてどんな人でも伸び伸びと生きることができる世の中になってほしいと思っている。そのために、私達は自分とは少し違う個性を持っている人達を知ることが必要だと思う。身体が不自由な人や、たくさんある病気について知識を増やしてみませんか。

＊高校生の部　「命輝かせて」

県立白河高等学校　１年　加藤　慶大

ハリーポッターの物語を読むたびに、僕は主人公のハリーではなく、親友のロンに共感していた。親友のハリーや、五人の兄たちにコンプレックスをもつロンの姿が、自分と重なって見えたからだ。中学校の部活のバスケットボールは、小学校からミニバスで頑張ってきた友人たちのようにうまくできなかった。三人の兄たちは、地元の国立大学を卒業し、役所や学校で働いている。兄たちのようにできて当たり前、できなければ、僕だけがバカを証明することになる…いつもそう感じていた。

八十三歳の祖母は、現役の美容師だった。過去形なのは、昨年の十一月に突然の病で倒れてしまったからだ。S字結腸に穴があき、一命はとり止めたものの、人工肛門になってしまった。しかし、祖母はストマ交換などの練習に努め、年末には退院することができた。その祖母を、二度目の病が襲う。今度はクモ膜下出血だった。その緊急手術からも生還した祖母は、この夏人工肛門から普通の体に戻す手術も受けた。一年もたたないうちに、三度目の手術だ。体重は、四十キロを切った。けれども、祖母はあきらめない。今も、懸命にリハビリに努めながら生活している。

祖母を支えているのは、「もう一度お客様の髪を整えたい」という想いだ。七十年近い美容師としての生活の中で、お客様と強い信頼関係を築いてきたのだ。東日本大震災の時にも、ハサミとくし一本で髪を切り、話を聞く祖母の姿に、手に職をもつことの強みを見せつけられた思いがした。そんな仕事に出会えた祖母を、僕は羨ましく思うし、誇りにも思う。祖母の姿を見て、僕は友人や兄たちを羨んでいる自分を、恥ずかしく思った。ライバルは他人ではなく、自分自身だと思ったのだ。どんなに年をとっても、どんなに苦しい状況になっても、自分自身と戦い、精一杯自分の命を輝かせていくことが、人としての使命なのではないかと思った。祖母に負けないように、自分の道を求めて、頑張っていきたい。

＊一般の部　「弁当の思い出」

中山　輝雄

弁当の話になると、いつも子どもの頃を思いだします。それは小学二年生の春でした。戦争が終わって数年後のことです。

四月も終わりに近いある日、担任の斎藤先生は僕たちを近くの神社に、花見に連れていってくれました。クラスには四十名を超える子ども達がいました。満開の桜の下で鬼ごっこやかくれんぼをした後、弁当の時間になりました。みんな思い思いの場所で、好きなお友達と一緒に弁当を広げ始めました。その時です…。「あっ、しまった。弁当、忘れてきたあ。」と僕は叫んでしまったのです。僕はどうすればよいのかわからず、桜の根もとで友達が弁当を食べるのを、そっと見ていました。すると、そんな僕に気づいたのか、先生は僕の隣りに座りました。そして、やおら自分の弁当を広げると、その蓋を僕によこしました。先生の弁当は深みのあるドカベンでした。その弁当の真ん中に、サンマが一匹、どんと横たわっていました。先生はサンマをご飯ごと、箸で、真二つに切り分け、頭の方の半分を私が持っている弁当の蓋にのせてくれたのです。僕は早速、サンマの頭の方からかぶりつきました。ほろ苦い味がしました。風が吹いて、桜吹雪が弁当の中へ入ってきたので、それも一緒に食べました。サンマがまるでヤマメのように輝いていました。ふと、先生をはさんで、左隣を見ると、サッちゃんも先生の弁当半分を食べているではありませんか。僕の他にももう一人、弁当を忘れてきた人がいたのでした。先生は僕たち二人の間で、ただニコニコ見ているだけでした。

それから、何年か後、私はこの弁当の思い出をきっかけに小学校の教員になったのです。

今でも、あの時の情景を思いだすたびに涙があふれて止まりません。恩師、斎藤正子先生は、おさげ髪の、新卒の先生でした。

〈編集・発行〉福島県教育委員会　平成31年２月

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。